

ソ連の日本語教師岸田泰政

小川誉子美（横浜国立大学）

ogawa-yoshimi-tr@ynu.ac.jp

【要旨】

ソ連時代のレニングラードは、帝政時代の東洋学の伝統を引き継ぎ、研究拠点としての存在をさらに高めた。なかでも日本語研究の発展は目覚ましく、多くの成果をもたらした。そこでは、日本人講師も断続的に教壇に立っていた。岸田泰政はソ連時代のレニングラード大学¹で最も長く日本語や日本文学を講じた人物である。彼は、1960年代から70年代にかけて刊行した書籍や論文の中で、ソ連の教育現場を紹介している。一連の著述は日本人教師が記した数少ない資料であることから、本稿では、これをもとに、岸田が紹介するソ連の日本語教育の現場とはどのようなものであったか、体制の異なる国で日本語や日本文化を紹介する活動をどのようにとらえていたのかという点を探りながら、岸田の活動の特徴を探る。

はじめに

外国語学習の黎明期、辞書も教材もなかった時代、母語話者の役割は大きかった。その最も古い例として知られているのが、帝政ロシアの時代、日本人漂流民が保護され教師となった史実であろう。ロシア語を身に着けた彼らの中には、インフォーマントとしてのみならず、日本社会や文化の語り部として現地社会に重用された者もいた。こうして交流のない時代から漂流民を教師として始まったロシアの日本語教育は、19世紀の目覚ましい東洋学の発展を礎に、ソ連時代にはさらに独自の飛躍を遂げた。また、そこでも断続的ではあるが、日本人教師も教壇に立っていた。

筆者は、母語話者教師に注目し、主としてヨーロッパを対象に歴史の掘り起こし作業を行ってきた。本稿は、ソ連時代の日本語母語話者教師として、レニングラード大学東洋学部の教壇に立った岸田泰政をとりあげ、その活動をたどるものである。

1. レニングラード大学の日本語教師

帝政時代は、首都のペテルブルクや極東のウラジオストック²で日本語が教えられていたが、ロシア革命後のソ連時代にはモスクワでも教えられるようになった。ペテルブルクやウラジオストックには、断続的ではあるが、日本から渡った教師が教壇に立っていた。ウクライナではキエフ鉄道専門学校にも帝政時代に日本語の講座があったというが、日本人教師の存在は確認されていない。

本稿で紹介する岸田泰政は、ソ連時代のレニングラード大学東洋学部日文学科で長期に渡り日本語や日本文学を教えてきた。彼の愛称は「ハチダイメサン（八代目さん）」だったという。つまり、岸田

¹ レニングラード大学は、街の名前がサンクト・ペテルスブルク、ペトログラード、レニングラードと改称されるたびに、大学名も改められたが、本稿ではレニングラードに統一する。

² 小川（2014）参照。

の前に、日本語を母語とする教師が七人いたということである。その七名とは次の人物ではないかと推測される³。

橋耕斉（在職期間：1870～74）

ロシア名、ヤマトフ、禅宗僧侶、密出国し帝政ロシアへ渡る。

西徳二郎（在職期間：1874～78）

在露日本公使館書記見習、レニングラード大学法学部（行政学）卒。

安藤謙介（在職期間：1881～？）

在露日本公使館書記生、レニングラード大学法学部（法学・行政学）。

黒野義文（在職期間：1888～1916）

東京外国語学校ロシア語科卒。30年間在職、教材多数作成。教え子にネフスキーやコンラッドら。

戸泉憲溟（在職期間：1922？～23？）

西本願寺派遣留学生。レニングラード大学卒。レニングラード東洋大学でも教える。

池田久雄（在職期間：1927～28）

大阪外国語大学一期生。レニングラード東洋大学でも教える。

鳴海完造（在職期間：1928～32）

東京外国語大学ロシア語科卒。ロシア文学。レニングラード東洋大学でも教える。

帝政時代のロシアには、膨大な文献が収集され豊かな学術成果がもたらされた。こうした伝統をもとにペテルブルク大学に東洋学部が設置されたのは1854年であった。一方、日本語の教育は、1870年から中国・日本学科の一部として始まったにすぎなかった。しかし、革命後、日本語研究の扱いは一変し、ソ連時代には日本研究が独立、細分化された。大戦中も継続され、日ソ共同宣言後も継続的に豊かな成果がもたらされた。

日本人教師をたどってみると、二代目の西徳二郎以降は、ロシア語が堪能でロシアの学問や社会・文化事情に詳しい人物であったと推測される。特筆すべきは、ほとんどの教師が数年で離職しているのに対し、四代目の黒野義文は約30年の間日本語を教え8冊の教材を作成していることである。一方、本稿で取り上げる八代目の岸田泰政も、長きに渡り日本語を教えたが、それまでの講師のように、ロシア語力やロシア研究の実績により着任したという事実は確認されていない。

2. ソ連渡航時期：出版物からたどる

レニングラード大学東洋学部日本学科のペトロワ（1953～60年、学科主任）は、『レニングラード大学における日本言語学講座とその史的展開』（1964）の中で、岸田泰政について次のように紹介している。

「1956年、講座はついに、日本人講師による会話授業の伝統を復活することができた。日本で名の知られている詩人で、文学評論家の岸田泰政が、全学年の会話実習授業をはじめた。その他、ソ連の日本学史上はじめて、戦後の進歩的日本文学に関する正規の講義が、彼によって、五年生

³ ほかにもオカフミオら数名の名前も確認される。

を対象に、日本語で行われている。また、特筆すべきことは、彼が、日本学科の全教授陣に、日本文学の特別講義や、日本語の特別講義を行っていることである。これは、本学の教授陣の日本文学に対する正確な認識や研究の援助であり、標準日本語の発音・文法などにおける語学的認識や研究の援助でもある。その他、岸田は、学生間にはじめての日本文学サークルの創設、そのサークルでの日本文化の紹介等々、本学日本学科の教授陣や学生たちの、よき援助者となって働いている。」(ペトロワ 1960 : 106~7)

これは、彼がレニングラード大学でどのような業務にあたっていたかを示す、第三者による数少ない情報である。ここでは、岸田泰政が教え始めたのは1956年、すなわち、日ソ国交回復の年として記されていることに注目したい。一方、ソ連に渡った年やレニングラードで教え始めた時期や期間について、自身の著述の奥付や著者紹介でも明記していない。いくつかの資料をあわせると、彼がソ連に渡った年は少なくとも1956年よりはさかのぼると推測される。例えば、1970年「ソ連で教えた日本文学」の著者紹介では、「日本留学のため、昨44年(1969年)11月に30年ぶりに帰国」とあり、ここから判断すると1939年ごろからソ連に滞在していたことになる。一方、この時期は、『レニングラード便り』(1977)では、岸田と親交のある文学者の吉田絃二郎(早稲田大学教授)が、下野新聞(昭和43年3月24日)に投稿した次の内容とは一致しない。

「岸田氏はレニングラード大学東洋学部の日本語科教授で20年以上勤めており、国籍はソ連にあるという。来年は20余年ぶりで日本を訪問するそうだが、最大の目的は墓参りであろう。岸田氏には日本の小説、詩、短歌、俳句のソ連訳もおおいとのこと。日ソ友好の架け橋としての功績は小さくないと思う」(岸田泰政 1977 : 24)

昭和43年を起点とすれば、1946~8年あたりの渡航と推測される。一方、滞在期間については、1970年の「ソ連で教えた日本文学」では、30年と記載されていたが、その6年後に妻かつ子と共訳したモルドバの絵本の奥付には、岸田泰政について次のように紹介している。

「1910年山口県生まれ。関西大学国文科卒後、農民文学を研究。ソ連高等教育省に招かれ、レニングラード大学東洋学部教授、25年間日本文学を講じた」『五匹の子ねこ』(著者イオン・ドルツェ、訳者岸田泰政・岸田かつ子、1976年4月、第二刷、理論社)

このように、岸田の著述には、渡航や着任の時期などが記されておらず、本人が確認しているはずの奥付の情報が一致しない。「国籍がソ連」「日本留学のため帰国」と第三者の言葉をそのまま引用しているが、解説もなくその経緯は不明である。

3. 渡航後の活動：自著をたどる

岸田は、1910年に山口県に生まれ、関西大学国文科を卒業した後は東京で過ごしたというが、その間の活動や、ソ連高等教育省の招待を受けた経緯も不明である。1940年代後半に、彼が30代のときに妻とソ連に渡ったと推測される。それ以降の活動は著作物を中心にたどると次のようになる。

なお、レニングラード大学東洋学部日本学科の主任は、1940年代以降は、A. A. ホロドビチが、1953

年から O. P. ペトロワが、1960 年から E. M. ピヌスが務めていた。

1940 年代後半？ 教え始める

1953 学科長に O. P. ペトロワが就任

1956 日ソ国交回復、レニングラード大学東洋学部日本学科講師となる（ペトロワの記録）。

1960 助教授（Docent）昇格 学科長に E. M. ピヌスが就任

1963 「ソ連における俳句 マルコワの『日本三行詩』★

1966 『歌集レニングラード』★

1969 日本へ一時帰国？

1970 「ソ連で教えた日本文学」★

1971 「社会主義社会における児童文学者の生活」★

1977 『レニングラード便り』★（前書きはレニングラードで執筆）

★は報告や著書などの題名

このほか、ロシア語に訳されたものもある。詩歌の講義で紹介した戦後の歌人による短歌、俳句、詩の翻訳をまとめたものを『日本詩歌集』としてモスクワのプロGRESS社から刊行している。同社の雑誌には、1963 年、64 年、66 年、71 年と日本の詩を紹介している。これらの活動は、小熊秀雄、近藤芳美、深尾須磨子、芦田高子⁴ほか歌人とともにやっている。

彼の著作は 1960～70 年代に集中している。次節では、『歌集レニングラード』（1966）『レニングラード便り』（1977）「ソ連で教えた日本文学」（1970）に記された教育現場を初回する。これらの資料としての性格は、『レニングラード便り』は、日本の知人に定期的に書き送った便りを編集者が後に再構成したものであるということ、すなわち、何十年も後に記された回想録とは異なり、出来事の直後に記されたものと思われるが、後に他人の手により再構成されているという点を断っておく。これらが執筆されたのは、1960～70 年代であり、ソ連時代の言論の統制が厳しい中でソ連の実情を伝えるものであるという点にも留意したい。

なお、『レニングラード便り』は、広大なソ連の風土や社会制度の中で育まれた人々の営みを主として描写する随筆として再構成されたものであるが、人物や出来事についての記述もある。人物の大半は学生であるが、同僚も登場する。個人の生活や家族に関する描写はない。穏やかな調子で透き通るような描写が多い中、一部ではあるがやりきれない感情や怒りを吐露する場面もある。いずれも職場での出来事である。一方、「ソ連で教えた日本文学」では文学の授業風景の中で、扱った作家や作品、学生の反応、ソ連の大学のシステムについて紹介している。

4. 自著の中の授業、教え子、任地への思い

4. 1 ソ連の教壇に立つ動機と醍醐味

岸田の謎の一つは、著作にレニングラード大学で日本語を教えることになった経緯に関する記載が

⁴ 1963 年にソ日協会等の招きにより、日ソ協会第一回の訪ソ婦人使節団の一員として訪ソしている。岸田の著書『歌集レニングラード』（1966）では、跋を担当している。

ないことである。これまでのレニングラード大学で日本語の教壇に立った人物は、黒野義文以降、東京外国語大学ロシア語科の卒業生や、当地の大学で学んだ元留学生であった。現在のところ、岸田がロシア語を日本で習得したという記録や、日本で日本語教育に携わったという記録は確認できていない。動機に近い内容はとして、『レニングラード便り』に以下のように示すのみである。

「父母や祖父母は、私と一番濃い人間関係があり、その緊密な間柄の中での言語体験によって、言語への感受性と信頼感を持つ人間に育てられた。それはまた、他人の言語への尊敬と、その言語を使う人間への信頼であった。私に、多民族国家のソ連で、大学教官の仕事を決意させたものは、こうした言語体験であった。(…) 学生諸君は入学するまで、日本語の存在を知っていても、一つの文字も書けず、一つの発音もできないのであった。そこで、私は教官でなく、父母や祖父母の立場にかえて、ひたすらに語りかけたのであった。授業方法と計画のあるのは言うまでもないことだが、学生諸君に喜ばれ、成果をあげていった。」(岸田泰政 1977 : 64)

幼少期の体験が、「他民族国家のソ連で大学教官の仕事を決意させた」というが、あえて民間交流のない時代のソ連で長期に渡り日本語を教えた理由としては、まったく説得力を持たない。

動機、ソ連に渡った経緯はさておき、彼は当時のソ連で日本語を教えることに醍醐味を感じ、学生について多くを残している。『レニングラード便り』の「まえがき」には次のように記されている。

「故コンラード教授やネフスキー教授の学風が残る日本学科では、漢字 4500 以上の読み書きができてこそ日本語研究者であるとする口語・文語の授業風景も、思わず残った随想の一つであった。このようなソビエト学風の中で私は、ソビエト諸民族の若い男女学生に説いているときに、日本語は世界の中の大言語であるとの自信と誇りに身のほてることもあれば、講義さなかに日本文学の再発見の想の吹き出すこともあった。」(前掲書 : 2)

日本学科で初級から上級まで各レベルがそろったコースでの外国人教員の役割については次のように述べる。

「新入生は日本の文字に初めて出会い、日本語の存在を初めて知った者もいる。そういう若者に、五十音の発音から日本語を説くのであり、小学一年生に教えるに似て苦労も多いが、そこに学習と一体になった外人講師の喜びもある。この一年生と次いで二年生との二年間に、日本語の基礎教育を仕上げる。三年生に進級する学生には、不備はあるが、自分の専門を定めその研究を進める語学力がついてくるので、他の講師に送り渡すのである。外人講師の寂しさであるがまた新入生を迎えて基礎教育に帰ってゆく。だが週に一回、三年、四年、五年の各級に日本文化史、日本現代文化史を講義するので、古巣に戻った慰めがないこともない。大きな慰めをもらったこともある。今年(1969年)の二月八日はレニングラード大学創立百五十周年に当たり、日本語の普及に尽力したと褒章をうけたことである。」(前掲書 : 64)

4. 2 教材・職場・指導

外国語教育で生教材の利用は、学習者にとって新鮮であり効果的である。当時のソ連で体制の異な

る日本の新聞を個人が入手するという事は不可能に近いことであつたと推測されるが、岸田は知人から新潟新聞の縮刷版を郵送してもらい、それを教室に持ち込んだという。そのときの学生たちの興奮を次のように伝えている。

「新聞は、その国とその国民の姿を如実に反映しているので、講師の見識と取扱い一つでよき教材となる。(…)私は大学へ講義に出るのに、カバンの場合とフロシキ包みの場合とがある。フロシキに教材や講義ノートを含んで登校するときは、講義担当の日本語というもの、日本文化史というもの、日本文学史というものを、思うぞんぶん説いてみたいと参考資料の多いときであつた。そのフロシキを持ち、日本語の授業、三年生が待っている教室にはいった。そこで教室は温和で親近感に満ち、私にも学生にも「さあ研究だ」という精気がわき出てくる。学生諸君にとっては、日本の、そして新潟の新聞による最初の授業である。ニコニコと取り囲み、ガヤガヤのよろこびである。」(前掲書：212～3)

日本の新聞を手にした彼らが真っ先に関心を示したのは食料品の物価であつたという。また、教材に関して言えば、

「基礎教育の最初である一年生に与えた日本語教科書はオリガ・ペトロバと私との共著のもので、1961-62年度まで使用した。」(前掲書：134～5)

といい、この教科書を作成する過程で同僚講師から社会主義時代ならではの批判があつたという。

「(…)教科書は、ペトロバの文法講義に従って二十一課の内容で、本文は私が書き下ろしたものである。全課を書き上げたとき、日本語科講師の会議で審議され使用決定があつた。語句の点で批判された点がある。(…)「仕事の成功を祈ります」「ご健康を祈ります」など動詞「祈る」を使った点である。「祈る」は神仏に願うことであるから、社会主義国の教育では使わないと反対された。私は「祈る」は心から希望するという意味をもっているから、それで使ったのだと説明した。すると、共産党員でないから宗教的言語を使うのだと頭をたたかれ、私はきもをつぶした。」(前掲書：135)

随想の前書きで示すように、レニングラード大学には「4500字以上の読み書きができてこそ日本学者である」という学風があり、独自の方法で漢字の指導にあたっていた。

「日本語科には「書き方授業」があつて漢字を教え、字面を正しく書くという目的である。最初は科長が担当していたが、私が就任と同時に担当することになった。(…)小説を読んでやりながら、その中に出てくる人物、景色、品物、表現などを漢字で黒板に書きつける。その字数は四十字前後であつた。(…)読んでやるとは、お話ししてやることで、一回のお話を二十五分で終わらせ、また最初から、そここのところを語り、その読みのなかに出てくる言葉は、すでに黒板に書いてあるので、そのことばを語るときに、そのことばに当たる漢字を指さすのである。二時間の授業で、同じお話を四回くりかえして行つた。学生たちは小説に興味をもって聞き入ると同時に、指さ

される漢字をみて、話すことばに結びつけて漢字を覚えていった。日本語を研究して身につけ、やがてそれぞれの専門の日本学へ進む学生であるから、覚えろと言わなくとも覚え、ノートに書けと注意しなくてもノートにひかえていた。他の授業方法よりも、この授業を楽しんでいた。」(前掲書：186)

ところが、漢字の導入方法や数については、以下のような基準が示されたという。

「ソ連には、あらゆる職場に「生産会議」がある。月に一回開かれて、その月の仕事の内容を検討し批判を行うもので、私の場合でいえば、その月の講師の授業を調べるものである。(…)その生産会議で、私の書き方の授業は乱暴なもので、小説なんか読んでいる、という意味の批判にとりまかれた。(…)学生には二時間の授業で、外国語は十字が限度である。その四倍も覚えさせるのは大学の授業らしくもない、という意味の批判があった。」(前掲書：187)

職場には、「生産会議」のほか、教案審議も定期的に開催され、緊張を強いられたという。教案審査の過程は、まず、日本語科の審議で承認されたら、学部教授会、学術会議へ報告されるというもので、そこで重要なのが、学術論文があること、すなわち、全教員は、毎年一編以上の論文を書く義務があり、研究が数年に及ぶ場合は学年度の終わりの12月中に、研究内容を学部へ報告する義務があった。また、四年ごとに行われる教員資格審査は、他の全教員に秘密投票を持って答申されるものであるが、ここでも学術論文が問われたという。

教案に関する審議のやり取りの厳しさから、「命がけの教案であった」「教案審議の席には、被告の思いをしていたことを想起する」といい、厳しい審査の中でも承認されたのは、「学者の間に、学問的立場からのものという研究への一種の自由が現存していたからであり、多民族の文学を尊重するソ連国風が徹底していたからである」と述べる。

4. 3 教え子と岸田の活動

彼が描く教え子は、教師の期待を上回る吸収力と応用力を持ち、納得するまで徹底的に頑張りを見せる秀才たちである。彼らとのやりとりを愛着と誇りをもって描き出そうとしている。プラクティカという制度に見るように、ソ連の教育制度を「労働と教育の融合した理想」として一貫して高い評価を与えている。さらに、自身の授業が現地の学生たちに受け入れられた背景には、多民族国家ソ連の多様性とそれを認める文化にあると自負している。「民族の文学を尊重するソ連国風が徹底していた」ことが、自身の日本語日本文学の授業を学生たちに意義あるものとして受け止められていったと振り返るのである。

「ソ連にいて、この国のいろいろの民族の人々に向かって、私が祖国日本の文化を、文学を、言語を語ることは、仕事でありながら限りない楽しみがある。ソ連は多民族国家なので、個々の民族が創造し形成した文化を文学を、その伝統を、尊重し、厳しく守り、継承発展させる国柄である。(…) こういう国柄に住み始め、レニングラード大学の教室に立った遠い日を思い起こす。ソビエトの青年男女に向かった最初、人間を育てる仕事をすると、感動に身ぶるいした。今日の日までこの考えは一貫して持ってきた。きたるべき共産主義社会建設への中核人物に成長する青年

男女諸君に、日本人の一文学者が、日本文化を説き、日本文学を講じ、日本の言語を習得させる仕事は、単なる先生稼業では従うこと不可能だと、厳しく反省し、自戒にむち打った。反省自戒力は、ありがたいことには、過去の研究の仕方に基礎があった。ロシア文学やフランス文学を愛読すると同時に日本の古典文学を精読した。(…) 古典から昭和までの文学を書きつづった日本語の豊富に誇りと愛を持った。古代から現代までの文学を創造形成した日本人の歴史を、その人間をはぐくんだ「国の歴史を、正しく理解しようと様々の学者の説に学んだ。私の中に歴史に忠実な民族の持つものを守り尊重する思想が生まれ成長した。この私が他の人間を育てるには、自らも人間を成育させねばならぬ。」(前掲書：205)

戦後のソ連では、古典から現代にいたる日本文学の翻訳が相次ぎ、研究も多数行われた。それは欧米の国々の研究をはるかにしのぐものであった。岸田は、文学の中でも特に、日本詩歌や児童文学など、ソ連の文学者が手を付けていない分野で文学を専門とする同僚たちに講義を行ったという。日本のものを系統立てて紹介した。日本の文学サークルの同人誌に定期的に文章や短歌を投稿し、文学的な素養を高めることを怠らなかった。本稿2節の冒頭で引用したペトロバが述べるように、同僚たちの活発な翻訳活動や研究活動を支えるという役割も担った。

歌人として、文学者として日本の文学サークルや文学者らとも連携を持ち、日本の雑誌を取り寄せ、その代わりにロシア語訳の日本文学を送るなど、ソ連の同僚や日本研究の先人たちの研究成果を日本に紹介した。特に、民間交流が困難な時代にソ連の日本語研究者や日本文学者と日本の文学界をつなぎ、双方の情報交換の中継地となったと推測される。

4. 4 歌集に詠まれた教え子たち

『歌集レニングラード』(1966)には、文学者の丹羽文雄が序文を、日ソ協会第一回の訪ソ婦人使節団の一人であった歌人の芦田高子が跋を寄せている。この歌集には、ソホーズやコルホーズ、パルチザン、七ヵ年計画も詠み込まれ、教え子とともに、ソ連の美しく広大な自然や豊かな社会文化遺産を描き出す句が688首、詠まれている。日本へのソ連理解を促すものであろう。その第一部に「講義日日余情」がある。岸田の教師活動や教え子に対する日々の心境の発露と思われる句で埋め尽くされている。社会と教育、授業風景、教え子との葛藤、教師職への思いに関するものに分けて紹介しよう。

●社会と教育

社会主義の世代のみ言える子のことばわれ個の革命たしかめ得たり
ソヴェートの国ぶり負っている子らぞ疎かには説かじ日本文学
昨日まで工場労働者なりし子らと日本学術極めの出発

●授業風景

黒板に大きく日本語書きクラス仕事に頼む日本人教師われ
類近づけ日本語の書き方教うるときソヴェート若者のいちがひびく
日本語は百花の園と言いきれば、ソヴェートの若きら深くうなずく

●教え子との葛藤

生徒の批判外人講師の念願に独創進まず声と受けとむ
学生の批判にあがない拓きゆく改造と思う非常の愉楽
言うべきと小言に時間とり過ぎて講義終わればさびしげに子ら

●教師職への思い

若きらに願いをかけて説く講義いま倒るるも悔なき日なり
夢いくつ子らに寄せ持ち限りなきこの教室はどこよりよき場
学問に若きちからを尽くす子がありてわが生華やぐごとし
教案を読み返し寝ざる講師わがいのちひそめしは子らに言わざり

一連の著作は、1960年前後のソ連の日本語教育の現場を岸田の温和な視線でほのぼのと描き、日本に紹介するもので、冷戦時代のソ連の日本語研究者養成の現場がうかがい知れる貴重な資料である。優秀な教え子の未来をソ連の将来に重ね合わせ、「共産主義社会建設の中核となる人物」の育成に関わっていることに誇りを感じ、日夜励む姿を彷彿とさせる。岸田はロシア語やロシア文学の専門家ではなかったが、長期に渡り指導にあたり、同僚の教科書作成や研究に協力し、教え子に対する気持ちを短歌に託して日本に紹介した。この点は、それまでのロシア研究を志してソ連に渡ったレニングラードの日本人教師とは異なり、岸田泰政の活動の特徴といえよう。

おわりに

本稿では、岸田の著作をもとに日本語教育の現場と活動の一端を紹介した。今後は、ロシア側の資料を加え、いくつかの謎をときつつ、岸田泰政ら日本人講師の活動を明らかにしていきたい。さらに、冷戦時代の日本人教師の活動が、ソ連の日本語研究・日本語教育にどのような意味をもたらしたのか、その実態に迫っていきたい。

引用文献

- 小川誉子美 (2014) 「新聞が報じた日本語教育―日露戦争前後の極東ロシア―」日本のローマ字社 (編) 『ことばと文字』 2号 くろしお出版 27-33
- 小川誉子美 (2021) 「ソ連の日本語研究・日本語教育―レニングラードを中心に」『新世紀人文学論究』印刷中
- 岸田泰政 (1966) 『歌集レニングラード』短歌新聞社
- 岸田泰政 (1970a) 「ソ連で教えた日本文学」『国文学解釈と鑑賞』 35 (8) 至文堂
- 岸田泰政 (1970b) 「ソ連で教えた日本文学 (二)」『国文学解釈と鑑賞』 35 (10) 至文堂
- 岸田泰政 (1971) 「社会主義社会における児童文学者の生活」『日本児童文学』 17(4) 日本児童文学者協会 32-35
- 岸田泰政 (1977) 『レニングラード便り』泰流社
- グロムコーフスカヤ L.L. (著) 外川継男・原暉之 (訳) (1995) 「ロシアにおける日本研究―時代と人々」『講座スラブの世界第8巻スラブと日本』弘文社 331-350
- 国際交流基金 (編) (1986) 『ソ連・東欧における日本研究 (Directory series 6)』国際交流基金

- ペトローワ (1964) 「レニングラード大学における日本言語学講座とその史的展開」 寺川喜四男・稲垣敏夫
(訳・註・編) 『ソ連の日本語』 第一巻 法政大学出版局
- ルイービン V. (2006) 「サンクト・ペテルブルグ(ロシア) における日本語学習と日本研究の 300 年のあゆみ」 『日本研究: 国際日本文化研究センター紀要』 32 国際日本文化研究センター 261-284

附記

本研究は、JSPS 科研費 19K00735 (「ロシア・中東欧の現代日本語教育史の記述—社会主義時代からの変遷を中心に」 基盤研究(C) 研究期間: 2019 年 04 月 - 2022 年 03 月 代表者: 小川誉子美) の助成を受けたものである。